和書門

類	號	函	架	冊
和書門	一七六八五	一七八	五	五三

内閣文庫

類	號	冊	函	架
和書	一七六八五 (31)	五三	二〇二	二二

内閣文庫

番號	和 17685	
冊數	53 (31)	
函號	202	350

国立公文書館
National Archives of Japan

書籍館印
日本政府図書
和學講談所
淺草文庫

御法

五十一歳　薫四歳

紫上病悩不本復請出家暇給事

三月十余日紫上供養千部法華経事　於二条院東北事

紫上送消息於明石御方事　匂宮為御使

法会畢各還六條院給事

夏二條院病悩明石中宮行啓事

任二条院東對給事

紫上与匂宮御物語事

源氏君中宮等御物語事

八月十四日明方紫上卒去事

六条院仰大将令落紫上髪事

大将奉見空骸事

紫上葬送事

六条院出給事
致仕大臣訪六条院給事
秋好中宮訪六条院給事

御法

花巻以哥（名也）号

可 紫のうへいたう御わつらひ [illegible]

哀 いとゝ御中 [illegible]

哀 御みつから十一巻 [illegible]

哀 紫上卅 [illegible]

紫上いたうわつらひ給ひし [illegible]

哀 一とせわつらひ給ひし事 法華千巻 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 事

[illegible]

[illegible]

哀 [illegible]

[illegible]

[illegible]

哀 紫上 [illegible]

[illegible]

こひかねてこゝろの底のなれる月と行く
松　いはほのかみにかゝりいつる
こひしける今宵まつらん　河千
千　あやめさしくつきのふるのへさゝ　同
待くれはさ御ゆ
松　さゝぶえくる行く
さゝて月ふゆも　松　御のくらき
山もありそしてうらきてさりけらく
何もみくしてへりくしく
月もくさのあり夜のゆくへ
各留半座乘華葉待我閻浮同行人　法然禅師
五倉一斎
貧
さてあのこゝろ作しくらへ　世なゝく世々世をて

おくらへ世のつゆく
かれしもかりしも草あつてかゝ
たれりあつにおもへて見つゝ後世の一室
うつそしくもつて
いつ若し　松　宗のしゆきさ
きしうちにりぬへくさ　何　いうきかすゝ人
たかあくれりてきぬ
今年のさゝくていふ絵うりよく詞し
まてつの姿ふて道世の方あれ
上いゝつやさの詞りさらうつあくてる
未てくるうく　しもころしさかえ
言いてこゝちそうりかゝしもそひけせ
かんくうつりゝさくれりかしれつ[illegible]

内々を　あそはしてやかて侍ありあはせて
いかゝ御同しことにてさしもうけ給はるゝ
なと花宴にてもてなされておもしろくて盆にて
河清の人御とうらう共ての給ひつゝ
年御ことく　さるの字清書
松浦の人々あそはされ候所　六角と云し
河清御所にいてゝ河清殿下給ひ　当下同
当河ノ殿にて御ことくとて云し
此殿にてあさなれてこれ同し坊にけすまゝ
御わたし
物も河説下給へし当白にて給へとて侍し
てゝ久しくの清少の事においてかなしくれ
かく云へく云之も宮　そのことは云之進む

かくて大納言参り　さらにあそはしてけり
事にて
此いかにしてあそは不あそはすとて　当御の御姉
あそはしてのしく　かくて事の命ね当しれとて
三従の輝し
ようかう御も一つゝ参陣し　さて給ひて
松浦の給ひし　そうして新形の給ひしにも　前の八
しらせてもてなし侍らしたまひて多くあそはし
よろしくつかひもてなしてまた又ていてゝ御当白と
こゝの清世給ひつゝあらしにて
当出出寮給申し　さあ　いあまゐ当るの心
の新律つかれ夜更けて　始めあしつてかまし
秋　松平当云不仙何当住下給

作り続千載　哥　いましらの迷ひく千載八
人のかくしかいうなへし
七條中絵あり有
これしるさる中ても　称　作にて恋くし
あまりのへ、さもあらし
内　春文きりく、ゆるそうたり　称　后ゆく
あるて一人にて詠ませし一人にて羽に女御中宮
第にて后杖る也しいふ中宮にて今上条ノ皇子
羽衣　堆秀の、いしの皇子后あて申さ八ねる
ご御在中宮ときし羽衣は作立后ゆる形く
うふかあり
いものつる　よつてる心新にかして　そよくこ
称　うつゆく新くいたへかかし　　哥并

とゝいそのくてもつねに作新しとてらく
一おそにけるものをすめのせしつてもの中新もゝ
しくそれにけるにめり　又何物
哥　一おにあなのきせ也に往きるもの新しき
五百塵點劫　うるしいゆ徒まえらく
哥　四　須ゆりうくしいゑ
もしらに宿をも　哥　地久なりにさまらの作事
前りきのかなとなる人のつるの本にえそこら
南しくてしきぬ　称　二葉徒て
世に中のみても　称　いとしの人の種作本を
哥　雨か繧ゆふかくこふるく網乾　みす金
不とり
行のなたもとめる者のうちものせる

一 珠光草庵茶湯侍四士 うつしみ 六
云世にもてはやさるゝ 抔利休の茶湯後に かへし
其すがたなりし
たとへかはもなしなんさく 侘たる人の 侘縁
すなる人も功によりし もの
ちゆとゝうるゝさんも まへる 八 誰も 五日
十夜也 五奏のしはて 六人 中にましくも
新の侘ともに 侘其 其会の壱 相応しく
侘のみなる事 此の年紀新をも事にて
新しきもうつしもつてうつし
札紫不り 珠光新文葉蔵 住内茶数奥
ゝくゝて 云ゝて 侘 侘し 一不くのたちにて
侘侘なるもしく 此則りへしあつしそ

一 秋 無かしま事なりし 侘侘の茶もて
ゝしりはんじゝしくき
茶の人侘の 詩人頭集の 抄ゆゑそのもの
ともかりけ 侘侘の本えの 侘侘りきく
ゝもかし
一 ね ゝもやゝへ 御事のかもして 茶杯
きりもす羊のあめし もゝ足す御て
一 ね 日ゝしく 子
ゝのりけ
惜しみ侘のすかも根にく 茶のつまれ人事の物とき
一 ね ゝもやゝへ 株菓 汲そのして 無ゆゝ菓子
ゝらゝもつ侘まて 羊なりけ いつも茶
ゝりしきすいつなりし 行へし
一 ゝゆゝ 菓り 茶へし

第　世尊採菓汲水のこゝろ　ふしきあらはる
ふることのなかに
世尊すてに入涅槃に入薪尽て火滅給ひし
縁なりと　涅槃に入りたまへて
第　薪をこりたまふこと　此の法の意をとく
ふるき世尊薪ハ千載給仕の薪なりと　当初薪
曹大臣の薪とこそ
ゆゑにこの御法をすゝむる　比たとへの事
ふれる心のこりとも　きゝしとも　あまねく　かく
人の囊脱もいのちとなりてまよひ
となる
薪をこりなハさもある御すくいの世にそへることなる
何　採菓汲水[汲]拾薪設食千時奉事経於

千歳　提婆品　この御法をすゝむるこの身をも
心やすく静なる心の給仕の世
をかみのこゝろなく　ふかく薪をきる
ゆく人のかゝる給仕をかへて　法のしらへをもとむ
こゝろもとしてこゝろをしらぬ
第　千時奉事経於千歳　提婆品　千歳給仕
をかさねてきく　うたかひをのへて　なかにかへる
かくしつゝ千歳のうちに　とゝまりぬる　かの
つれなき法にこゝろして
こゝろさへ世をすてゝ　人をまつ心のうちの
第　世尊独人撃鼓宣令　提婆品　こゝろにて
縁なりとも　かゝるなかにいつかは世尊ハ行の
ゆゑ給ひしにて　こゝろ付　鐘の鳴る音

こその事し

最にまかりてゆき　ぬもくり霧のまにまに

みたりをもえそしくそもてもひかりに

与ろ自余也

みゆき給てひとりしのへきも　ひとりゆきき

京をとおもたにくゆみらかつきね

千もしをきらのしみ波まてもるにこゆなむ

つしゆかれに行あかまき

百かかりのきいれつ　京　幾のすかそし

川に成　百かくら　佛まへ世をせぬかなし

まれしも新り　つゝに

まへりのましくきしこかはし

何　陵王　一名羅陵王古楽長曲　荒序八帖拍子各一合拍子八破拍子十六終帖加拍子

舞入時以安摩序二切破三切有䴡也而破四切自中古八也

通典云大面出於北斉蘭陵王長恭才武而貌美常著假面以對敵嘗撃周師金墉城下勇冠三軍斉人壮之為此舞以効其指麾撃刺之容謂蘭陵王入陣曲

尾張濱主云高野天皇例好此曲仍奏御前還入時又吹沙陀調入声勅以安摩為入声此古老所傳也

羨て陵王り　色めしし　六　てゝてくらみ色

うみりてらも　後めの色のに

内役新羅陵王色て伴出色上太鼓く

ぬ　何後　手後にし　一百く　笑

後色つ

られてのわくさしけるる　笑　あくのさうれく

かれし森の嵐かな　庭のうへにこゑのきこえて
雑　可有之
たちかへり人衣のうちをつゝみぬ　恋し　以上玄
松　又出る月のかたふきしは
うつゝにもたれとしもならさりき
松　昔の人の中はなれつゝ
すみつかはる世のあはれなり　無常しけく
うちゆく人の御こゝろをさへのこさぬ
まして夏かなはぬ時の心つもりて
松　たちそふ御心もしらぬ物なれは
さらにちる事をしるへし　なとなり
玄　いひかへたる心　すかしゆゑこそ　玄
才　かれをしむ年のかきりにて

来　なてしをたつねて　玄　小篠をたてゝ
しをりさへうちわたすらん　玄　たちかへりきてあさからん
しられつゝ
まくらかる所あらはしむるもの世にあつからて後へ中の心かよはし
松　御代をかさねてのちは御代の便遠くみえ
また玄旅の中きこえし今日のふるさとをしのひ
ゆかりのうちつたふ世にはれへきよへて　可付也
ちかひてそ後あひしきゆく
才　一二句あとにはなれたるをかへりて世にあらし
しはしは付けり　値遇のうちにもあるましきをなつかし
まつ世の付のうちや　大ツして可然
第　付てありおほえてつゝけすは値遇の沙汰
候まし　おもふへし

願我生〻見諸仏世々恒聞深妙典恒於不退菩
薩行　以上義　記これなる罪しもうてかく
の中にかりなき
往しゆ苦ちゆく人後し大事のうちにすくなき世をいとし
於わし上にて忌作那事を浄人の中にしつゝ给
忌しめく於しく讃わ世をふる有のまゝにこれ
とられて罪の徒しく
於　苦報業わしゆかうにしても忌しまう
さ出さてわかりよ於て世うなとに忌てくら
苦　とすらる罪に徒さしかますけ人こゝろにて見る
まされたるに　於し八徳ちゆ御きし
とくさてことはれて給苦に大くての御く
す　こまそれし　於ものこゝう終

くすわくるゝ名のうちに於御しにとゝ　善ゆ
世にはあらてこゝろあつて世のなほくしてゝ
善　不断讃経懺法　菩　おもきかたに於て
可くあらし　念あることし　とつ有とりく
まつのおつきにさく　宗廟中代祥御ゆ
善　世をも幻の巻　わしく香のおさらく
大臣にあつる心ほうの有ら世をも於く
しらさきみの廟経のくゝうさ御ゆて己て
中宮世御う　ら　何も中宮にくゝ御ゆ
中らうしなてら　二条御ゆ於御の　ゆ
於　わし中宮　善　立后ゆる世にゆ
后宮らしる　善　わし中らす

宮の大夫のかたへ行て御消
あの對におはしますかとつねにのたまひて御消
きこえさせ給ふ
は二条院の東のたいは中務の宮の御休所にて
ありけるをいまはかの東の方の中門
南階のうへにてつかうまつるなん宮の御
ことゝもなり
十二条院の東のたいは中務の宮の御休所
あるへしとて ものしてまゐらせて
宮の御たいにおはしましてすこしよりて
又寛弘西宮にて右大臣 二条院西の對
わたらせ給ふ所 宮のおはします所也 東
いつも中務の宮のおはしますところに東の對子
にて中宮の御方へまゐらせ給ふとこそみえ

ゆるして
秋の月のいたくあはれなるに 二人の
まかりて御前にて これより
昔のある人の御前にてとかく申さ
せ給ふ事 かくなりけるに二人の
いもうとおなしき 御ものゝ
ゑらいの人のおもしろくて
右對面 家の御すゑの御方の家
ことなるへし
むかし御消息の御かへし 御消息に見えたる
へいをはなちて宮のおはします所にて
かくのことく家にまゐりて
門中務の宮 小山殿 六條ノ 次将以下一

員近侍等供奉皆未聞行幸其外宮司
并中少将者節下参供奉入御之後王
以公卿面々自御前清涼殿不喚之節着
座矣　已上弁内侍注之
さてしもさしもなくての　ためし中将定
ちんてうまくえとしの有しを
とかりをすゝめたてまつらせしかは
殿中宮の御まへにて候をと　みなの
ゆふへやとり給て
弁内侍中宮大夫とてまうてけり　かなりの御
家ちかくありて御かうのこしのへとかへる
ことしは　いかならん　え
かくて　あかりまつりはつへき　思ひあまりぬ

内裏よりとの給ひしを　新大納言
こゝろみ
かくてすかへりけむ　右中将の事を
くくまうしや　あらしさる　侍従の大納言
まかて
藤大納言中納言まいりてちかく侍らんとまへの
つれ給ひしを見し　かとも
わかさ中納言のかはりてのち　光定
かの御中納言の家にたまひなと
御供して　まうてるを
いさ　ありし言ふ御
出羽のきの御ちかく
侍従中納言まいりて候へし

此所にて一人忠のゆくしゝ西かゝり山さしたゆく
秋津て後白河のみかへしもかくしにつまてせ
うるつゝもさて中にも東封つゝ高倉の
宮のゆくさくしくほかへても合から
ゆくもろの末の封りつ平家之高卿
かりそ内相計後之高倉の白河ゆくして
高倉のみての御おりしますぬ一し　よす
うつきうんかくもたちにしかの御幸
高倉の宮の御井くおりしそうすい御伴せ
かうらゆきしさるも御しけかゆらく
かうもとうりこのく高倉ゆくさらの
うち給さく宮のすしゆくに仏とゆく
うえゆくら

えつゝも給え去まにかつく　御あわし中より
いのかたくもく
あしうすて給しとへく　御中くもの己
中し給しけも百事よくも御しまゆそ
わもかの
ゆしまたなまへ　御高さく幸くしゝ
くそ
み　ゆしけゆの給ととくしかくて
高幸ひかにかのゆかくゆりく高倉中く
うつ給中まめく下高く百て玉く七くも給つき
うしゆゆ入ゆて南いのてもし高傷（傷）のむ
うんらしもつりけゝつくえしちのふねく
遠江済て二給諏訪しいし給治伯原陀

歎感あしく

人ときてうあらかくしてとて何中文書院

經

まへめのりうとたゝ　む紙もわとハ本封し

そらするかく書の所傳の本にハ雑し

校中とその所傳経に書キまいらす

とらく定家らみわりくてら由て　裏内

右ニ馬活哉いかし中ゑあ名段二重の

書し　三光自筆

む紙馬入て本封し中とその体ゆく

らりにりら候く　とし

定家らてるの神くそうりて表の初り　有

其文三光自筆

別

紙馬表封し中ゑの体ゆく候ハ紙し　六行紙ニ

名字書所傳紙て六てを紙とく一紙と

紙歌するの紙り、そりまきらうあんとある

と：ー中らのかくしりてあのみく

りらそ下し事紙てしかくめ紙付まし

そしおいしうらもる与らちくしら傳紙め

附て二てるの表の封くそう紙めし傳の

紙しるをいく紙うくさうかうと先いくてら

紙は表のみそまうあんてすゝ
りまの六書所く紙く紙くあらゝ

三てうとあるその中不

一し　定春合　定中あしうそ紙へら

まつり紙りさくて　定の紙ある百細し

まつさとその文かいとそうとら

月の[illegible]内に上今宵して　松　[illegible]中空
よしや[illegible]　言　帰て[illegible]
おもはれ[illegible]
松　花の都　月　こゝに二ての御すまひ[illegible]
こゝへ入[illegible]
松　[illegible]の人　[illegible]雲井[illegible]
[illegible]桜の[illegible]　月　[illegible]の世の人[illegible]
ここのかしこに[illegible]
若人散乱心乃至以一華供養於畫象漸見
無數佛　法華
曽非種所想元亮爲是巻時供世尊　菅家
[illegible]
[illegible]

松[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
中[illegible]
[illegible]
[illegible]
今[illegible]
[illegible]
[illegible]

〽ちうらんの内　叡覧にかけて　めでたく
ありとてもみかど御らんありて
ワキ　宗茂のこの中将の言一と申すところに
こともなく
二十八のころもしかまじ　シテ　宗茂のうかゞひ
うけたまはり候ふ　ふかく中将は御出家のよし
宗茂の　ことさら鎌倉にあらはれ候はば　さらに
ありける　二位殿にもいかにもと申しさまにて
ことにつけても中将の御つかさ　二位殿のおほ
せにつき　いかにも申さんとて中将の
御有様
こそいふときゝても　ツレ　ゆきたまふの御物語
ありしよのあはれをしれ　けふこそ中将の御心も
いひおりくを

こまかに申しはんべらん　シテ　宗茂の御はなしの
きゝてかうかたにはまたいかにもとや
ツレ　げにや前もこの一樹のかげの多生の
あひつれてかよふ　御中の御なさけもいか
その世の御身の御心　二位殿
まかせて参りけるよし
しかもいはいさてこそ　ワキ　中将の
さりながら
このたびかたくは　中将の御前に　御前の御
前より中将も　御出家の　御所存を
申しもして　あまつさへ
かくとても心にまかせ
つかひのよしをもつて　さいはいに　シテ　無念のこと

某　物おもふ人のゆふぐれ
おくつゆはけさこそおもへすゑ葉は風に乱るゝ萩の上風
某　なくとこゑ／＼もらしかねてかち
松　くらきよの月にたのむも／＼く
しられぬ恋のあはれいつまてかくれて
ありしよへら
ひとりのなにかとへら　某　枝のつゆもろき涙を
ありくゝるへら
子　庵斎かけての比おほえて後の世を
へたゝりし
某　秋風のあはれの前栽　うつろふ色をなかめ
くちくらて
くさく波の花にさそはれ行　松　くいつる
かけし人の世の常いつく見えつゝ
うつりゆくかけはなれても萩の露かほ
つかふ月かけ出かけ
あとも世をいとふ身は苦しや世の中の松ふくさとに捨てゝ
河　末の露松の露さへ世の中のなかくさくかへらぬ
なかきし　和歌威ア　不審
中もたはきしそうのつまづきてこゝもつくる
しかへ草の露
松　後の世の宿りてかゝ行のまゝもへかれ
某　露の中にいて涙もしかくてもかさなる中の
こゝのおくそ世のさためなく
しかくえなしはかなくとて　中ものて　動　ヤゝモスレハナリ
秋風のたへしら露の世をはかなき上にうつしかへ

何　暁の寝覚ハまくらにちかく鳥聲聞えて
ものゝさひしき人　さる御事にて
松　中々あのさはかしきのみこそ寝られねはいつも寝覚の
もの思ひ杉の下かけよりも月のかけこそ
きこえけれ我も行て聞かんと
俳中ぬ　ひとりきゝ給ふかな
くてあるへきにあらす　もぬ松　杉をたにいまも
うらみ出たまひし人あはれに思はせ給ふ人とも思ひ
菊　いかに申す　松　また何事を申されむ
今ハ何をか給ふへきと仰せ候へ　松　思ひ出す中々に
しかも御中へ祠
いとなみける給ひし　千鳥まてをきゝ給ひつゝ
さるかたにつらひあらんとして　き

ふらくもつらいはいそきて帰りへ
菊　母の御わかれとなりせめてはまこと事
菊なりけり
こなたもうらみはつかしく申すにて身の上のつらさ
とくにとても
松　今のつらもあはれに中々ハとも
かく思ひしてまで
ゆへ極楽へ世の千鳥にまして白つる書状
も又一人あはれてもむなしく
羽　たゝわりの中なり　菊　世上の事ともなく
あるまじき事かと申す事ともの中なり
こひしく　羽なきて　羽つゝ事
松　春の夜くる間入りし

けしき人　ぬ　いかにかくかはらく
かくいはるゝのかたのみはたまはん
御たまはりてまへ御一門
ごふらのくはいめしたまひ　かたしたまゐ
まなびの比にて
そのふしにたてくれ　万　巻のほうにたまはし
たまふりてかくたまひ給へ
たまはるの御給ひ給ひて
給ひたまふるの
おしかの比なの事御をくしたまへ　ぬ　人給の約せめのけ
わらへく
かはくかのまへさまへましき事り
たまふて安成かたまはり給

一日一夜をいましむ事のまし　何一日一夜受
持八戒斎一日一夜持沙弥戒一日一夜持具足
戒儀無欠功徳已回願求生極楽国
を一日一夜もいましめをたもちて安養界　往観
一日一夜の戒功徳によりてむまるゝ
往生礼讃云中輩中行中根人一日斎戒処金蓮
なお如来の功徳もあまし
まことにいふにいはくましくて後の
なお御りてたまはりたまへ　たまはらく
かくいふよりふりかはる給ひて　ぬ　これも御給ひて
かしたてりぬ
こゝろそれはなしく御らん　おもはかり
御の前なかくかはらせてまへ

わしつかすかくつ露しかたけすゝき
松 又秋りの月こゝろ秋りの空す月のうち事を
すりかしき
あらしにふくして 松 世をの外もうし
由 老うつ竹の事れし 何そかふしたゞうつ
こいりかくつかしてもすか庵そ仙人雲ほ遊しき
手 しれ世をりにし 世かしかにほうり しつ
阿かりしていきかす有人のきうて 音しく成けく
あかりとし紅葉もしろかく
川 あかりみて古つく 玄る又秋りの九帳か
川あそ多すこゝあく
由 とかのんれてもしかけて花まつの作り
松 御のゆくさ秋りの中きし雨おも作く

まつきれ帳のくちあくし
つめ老のかそうつれこかし物かく 松 又音も
ふくたすあそかも 御つ初
ちのこ思ちしほうあかりく 是 ちしゅろこと
ちの和むくよ手くし
ふまししきし乃とし 玄 又秋りのちこ
つれくも 松 光宿やと
ふかくうちゆゑうりお 松 つきろふ
事しすりかいてつ
ちすりる玉しねの中つく ゆかつりこゆるを
松 雨もゝ初し 又秋りのんく 玄
ゆくなす事もし 御のすゑうし へ紅粋の作
つらかくし

いかにても行をせよとすゝめなから
ほど夕兒の薫上のうちなからえて　秋草 子
おもしろくつゝきて　長　前位物まのとゝのほる
とよかみ布やみなもとの心にかなふものを
重みく新すれる世　さしきをすし
やつくつゝの日もうれし　葬送のつとめ
かつもぞ云(え)かしても　阿　うれしきへつゝまえんにて
ありとどかり　かくなるのも殯ぬるかな
蕉　ひとつ西田とし
秋　いかにてうらうそなくましてあれはともなる
さても　ちまうかれし　なくや
とおもしくひろくせ　葬斂の地のまゝに
いつうしきき後の御墓も　いと遠きからさ　桜の本

長よかきなく
市中の初しもの身　くれかつゝて
枝　けのふもとの　中ちりまてすゝむるともえて　子
蕉　薫ら隣で中まくいそぎぬ
いつつしきうか　蕉　御長の上でもその
枝　いとれなし
大えのあのゆたで見　薫ぬそこえうらいなの
重ぬ足しいつまく
月の信の申行たるか　枝　薫る　八月廿日
葬送て　子　おつひさはて二つもちちゝし
行よく
十四日より共くまちくなし八十五とのの暁をうつ
阿　十四日　行島　十五日暁　葬送て

諺抄十四日よりもしは萬葉十五日よりもしかれ
こなたに御事し
弟十四日より重の喪をせ日也日数
とて読ぬれと月の終りて葬送にまかせ
こよ
松 しかるに十四日より廿十八日まて
葬をすく喪に傷りの事あらし古人の体にかなう
らし さりとて各々しやく
日まて以てきらか中のた 御傍の如と
せきなの前をとわすく内わく部
歳云 せく事に云わなの事には神の御事へ
又て こう 又云ハこれきかわ八十中松に
し何しかしつ年ある也

しくよりかの心 御の出家のあゆ
へよくにてきのてをも 世の廿世以来
つわくして事し
まいりの本をよ 松 大将の後に
風かの合さる 松 大将の住して
歌 世合に付かわしと 歌 世かの御ゆきにもよ年て
しいのの事 しの世歌 只風は立ちて
又ころの小花の萬に有ける
松 御馬にとつてし事とし
あくいくとして候て のといくまゆら
いつちて事て ちわにてりくとしくてよひかる
河 お舞り後の事より いくもの事にも仏典有

政 揚ゑに志ら〳〵て 直 くら今かすみは
よそにありしかそてつゆく涙てまよひ人
不尽井にて
いつのまの秋の夕のゆきさりとかうまてわかもの多
政 有し世よりの夕ゆ今いのきうらまこしは
うちしいて来し
丹 内にわかのゆかり色ゑ御ねく正くらう錦り
うてはけふら錦くら云うなはく今いさ
秋 いかにつの秋の夕つきなかつ吉かさ
世合ひは扨く空の柿まれ〳〵ゆゑ新の
すそう年しくれ 冊の移の加ゑめ
夢ゑきるゝさゝもけかの云あるの
詞ゝはは行く以婦つくれうし世をま

みゆへし
すいかへなさきしうい世谷の五くされも
の中えうそらしく〳〵いつ〳〵かの錦のゆかりの
かれこうのさ 政 れくら錦もあわの
さき伊のての今仏 四十九日めかけさゆる
きら〳〵そゆへし
うてもふさてものうきのさ 政 もゝへゆの年
いかつらのゆうかうさの 政 ゆのふし
かこんかうしけふなしのて
ちゆへふつきな空のつきの今細いそりるの
さまいし来しい初頂有ていさ
政 ゆうへの何いろし後かゝゆかなさて
たつきいし来しうか頂有さもかなゝへ訪さ

みつからいつはりて こひつゝみなく かくのことく流る
礼をしるへし
又つねのまことの事とこゝろにおもふへき
さらにはかりてゆるかせにすへし
いかにもしもこゝろにかくれてまへの母に
惣してちゝ母にはかくれなくつゝしみて
ね 母 兄弟 外祖母 伯叔父 その外人々まで
事
私 舅姑 夫 兄弟 上臈上﨟まで 其の事をおもひ
ゆるすの心しりすへし
さためのかみの事はなくしてこゝろにかなふへし
まかせしてみたるへからす
ゆめの心ひとつをたのみとせよ

かやうの事より みたれそめぬるなり
中にもきのとくなるは 心かなしきなく
ゆめくしつゝそまつり 内義にも人をあまく
まいの事はいつかあちこち
かりそめにもその心のつゝしみをすへからく
あらことはしてふかく
ちのしとをへしもかりけく 其 おやのおや
ちうしとらいも人すへてもせひゆへし
はずかしきもの 物語しつゝ 伯羅おほく
しるしもまかしくしかりてそもさへ
ゆゑなきはゆのうちに有へく
ちしたるへし 能々 かくこし 行ふの
其 かけたる その事なりて こゝろみて

けしうくいくまおもひかりかし
せしたいめの母上　業平　業上てちゞめ
いりけくく
こゝのまゝの事をつし　松　八月十五日ありて
子の御ゆかりをおもしきまへさるもひしく
松　業平おもしこいさしても又母上今大切を
行くへましにはかまうしてくての月みるのきを
おもひきさしいかりけるとも
千　まのつるりしの月　ありつてゆるも
法仕人官
御身の若くいらの御んしく　ちゞの心まではづそ
いひけつの行くへとのとぞしぞくめのかはらずかみ　女房を金うそ
松　いひしてき業平ひいてい　千
いめしくてき業平今のくちしやう八思ふ十郎か

ものを今のくもてまへむし　かわしうそ
業平の事まさと　女房をおもくなく思ふのてし
女房さく女房今をいりがけ大事の世をそつてけるを
松　世にあるの世をかるのかに　きをぬいつり
千　世てうく
紅　業平ひしくされいかずおもて指当あれし
ふ事おもしいかりのし女房にてまく　大事
八月十五日　おもてをしつゝくし　業平のそこさへ八
此なかにいてましをもひての月の御作えし
しまきわてもハ業平の兄ゆひそ后のと
三わきとく御事所にいゝくてなっしと
女たちのかへ　松　無停ともに御神
青くおも御もつくらめのけし　くりらつゝし

こゝろもさまざまなり　すゑ
又此のまくらことばハ歌のこゝろをあらはしてよ[illegible]
ものゝ名をよみこゝろをのこしてよむ[illegible]
いふなり
歌よみのすぐれてハいにしへよりためしおほ[illegible]
つたへてのちの人のうた[illegible]
歌のみちをたゞしくつたへかゝるまじ[illegible]
さまざまのさまをとりて歌のこゝろをまなびて[illegible]
こゝろをよくとりて歌へつたへしことなし
いにしへの人のうたを[illegible]
あはれにおもひてよみしなりけりかなしきは[illegible]
つねにおもふ
この歌よく歌の[illegible]

年をへてしきしまのみちのあとを
なをまことにすぐれたるをえらひ　求　代々
まことの歌をえらびて八代集をえらびたまひ
すぐれたるうたをとりて[illegible]の歌の
ひとつ　廿一代の勅撰の[illegible]
歌人のうたをえらび[illegible]
百首をえらびてうたを[illegible]　百首
きよくを　上中下　三つのくらゐ[illegible]歌人の[illegible]
わかきもの　中の品にはあらで[illegible]
するにもあはせて[illegible]
秋　のなかのあはれ　作者[illegible]
こゝろをもつくしてよみて[illegible]
ある中のうた

一 令す九云主君父世主服一年
昔はさり人昔より今まで絶え鈍色なども見え
ぬる由しか有ける時々にはなりけれ以は
素しらずしもの物わかれする事なし以後
きわつし有
ち 妻二年三月服暇廿日也 如法服也
子 妾服并妻付云り 張りアレハウス墨衣ナリケレト涙ノ袖ヲフチトナシケル
子 秋ことを中人 議りなとかへ法服の
うちしのびさしせつゝる四つりちをもてそへ
ちるく一し
世中りさとらひさめそこまゝ人て
あ 詞を人りそねまき詞てけまで人の服
かれぞしるなん人の衣もわかるゝ人の見せ もとら

もとらとの服参る 詞て もとらくのやうとのみ
うしも有由しき
わしそ子事給ひこそゆかりけりめる
さしとせ御事とたちやうなるしかくて喪
あるくともくはりわたるべきしはそ
まりてほかのの 大将のゆめ宮御し
人そささてもくしともいてなもらしてそ
世わかれしやく
そしこうあやしく侍つてまうりなきやうつ
ゆりさぬの女房なりくしやくもろい或ハ尼ニ
あきけつゝきころ給ひてすもつてくるてこなう
うちら
まていやかり給のきりとしつうちも 故秋好中宮

河川ら
あかの尭
あへうし花
猿へ止信う
なさくみかす
くし

秋のし中あまし御たへ枕掛るはなく
たのしめくかくれのしまかつはるのいつみて
たまかもくし　絶まつの中あつ
枕絶
わかうき光つゆしきさすはるの枕まも絶らかさなけ
まは絶のあつくしひかすこ
秋
むしさくさらて春より　いつ絶らうあて御ふ
今のたのうさいへ枕絶掛くうかつしらたら今
しわらうか光きこそさしゆ絶こふへ春あ
りのく人うら絶悪つと付くまりしたしいちう
まりし御中光の秋りらなうかり絶たら
なあなてたてはりくしはたしらいあくまあつな
くらしけゆうきしてはりしつまく
若のた悪日し

秋
秋つれなうきくらしへ光の光つと白つて寅ふ
いねかへし
今かんてしゆう　枕絶さしひこらんりて絶
今たらひ今のちうつらそ絶らく
うのふうしけきくうしくみくこく御ふ
若ひまは春えて　京絶はつ寅ふ是きら
秋
御のこと
御つうしく。御のかの殴しゆうくもりくうく
みくさをつゆく
いねつひかうなしかつしん芳の　あしつらくん
うとせ　ま妻りに　此枕掛いしつしれくなしく
うゆうはし京丹すうしとうてくうるれへそれたつね
むかし
うかりかし　京丹しいいしくきのつ絶たう
いおらく此絶く　京かのり　うゆうしせなれう

かの秋もそのてくさはしかしこは　かの君せ女
うちなかめてくらしてゆきて由ありてさまのかみ
いとほしけれはなとてかのかみのけふかたらひ
うちなくもとゝものかつらせんはあらし
うちそて我かみのくに由なしとて共に
なにてくらふ心のえ　こゝろきて一つとの
ねまするそうらくてよし　当てこれは
うちなくなみなくうへしかしこなとかし
かの中をくさうしなとき我まし　うちなかし
ちうなかりうなけれはえりの中へかみ
かくそのてなかにかの我のなのかきうち
とくきとよみいへつかんなかてぬすそ
かはつかし

かくてみなしましは后のまへにあるのいはせ
あまりにて秋とてなるくにをもよしなし世を
なくさむ　かくてはるに事もなくて思ふゆゑ
こゝろをは
かくて母君かなし事にては
としはことしりくとかくよろこひてなれはなは
まこと
いとまのかはしこそとめくらもの中にも
うちはつかはしなくも中将の　こなたへ
このたりもてしりくしもひとつりて
てくらふもうちそせりうへくこそ
こそかくて
かくなくてそのまゝ　中将のへすゝきを

すゝしくなりし当　松　佐きくしさり
ちる山路にくかりて宿て幻みて見えつゝ
紅葉つゝ人しけりし出
雨ふり行ても名にいひつゝ入ても白り雨ふゝえとも
今ひとたひ神ともろくて
行かへるも名の色　毎のしゝ　み刈まさ
立わたく人きりにし　善　名のちかりつゝ出家
あさき事にかりて有色ことも　悲歌のあはれさ
世はきのうのを　善　今の色
つくまひてきつ名事　御のちかくて往きぞ
ぬれしくぬれつゝ
まへ寺の二つの月も　河　俄行しもゆふけへ
色かすさく出かてつる世の人を　つゝみし　長川之

千世かつ寺あかつゝくし三山行　松
善　行の一つの山あきつゝくゝ三山行
寺の色をさし
こかなくつきかなかも
千とせのちかなる　くく　河の音　長月さて
中なつのきりしつなる行の　まかく　出ぬ三
こゝね
松　かし中なし

弄奥勢
羅陵王　古楽有舞　中曲　舞次第
先小乱声
次嗔三度時畧　一度次嗔序次音取
次荒序　次入破
次安摩急　当時舞
應安三年三月八日右近将監豊原英秋依自筆
議元正端午於御前写之今私写之也

国立公文書館
National Archives of Japan